

# スーパースターの経済学

大橋勇雄

プロのスポーツや音楽、芸能などの世界では多くの選手や歌手が下積みで極めて低い報酬に甘んじる一方、トップは巨額の報酬を稼ぐ。最近、翳りが見え始めたと言われるものの、今なお日本で圧倒的な人気を誇るプロ野球を例にすれば、昨シーズンの最高年俸者は、野手では5億円をえた近鉄の中村紀洋選手であり、次いで4億5千万円の巨人の清原和博選手である。その一方、各チームの多くの二軍選手は500万円前後の報酬に甘んじている。ここで二軍選手の年俸は、中村選手と清原選手との年俸格差の10分の1にすぎない。つまり、トップに近くなればなるほど、報酬はうなぎのぼりに上がり、しかも格差は広がる。こうした現象は、多かれ少なかれどの職業でもみられるが、プロのスポーツや音楽ではそれが極端な形をとって現れる。これがスーパースター現象と言われるゆえんである。

なぜスーパースター現象が生まれるのだろうか。この現象を経済学の枠組みで分析したシカゴ大学のローゼン教授は、二つの要因に着目する。一つはマーケットの特性であり、もう一つは選手間の代替可能性である。さらに詳しく説明しよう。

まずスーパースター現象が生じる職業には、人々が見たり、聞いたり、読んだりして楽しむものが多いことに気がつく。そこでは、多くの消費者が同時に一つのイベントを楽しむことができる。たとえば、ドームでは巨人・阪神戦を何万人かの人々が観戦できるし、ホールでは五嶋みどりのバイオリン演奏を千人をも超える人が聴ける。またテレビやCDなど、近年におけるメディアの発達は、さらに数え切れないほどの多くの人々にそれを楽しませる。これに対して、衣服や食料、医療サー

ビスなどのような通常の財・サービスは、特定の個人のみによって排他的に消費される。この差は大きい。イベントは低い料金でも多数の観客から巨額の収入をうることができる。一方、いくら有能な外科医でも同時に複数の患者の手術はできないから、報酬は一人の患者の支払い能力に制約される。しかもイベントは観客や聴視者が多いからといってその価値が目減りすることはほとんどない。逆に、観客が多ければ多いほど、人々へ共通の話題を提供するというメリットが生まれる。こうしたところに、イベントにはスーパースターを生み出す素地がある。

これまでの議論は、マーケットのサイズ、つまりファンの数がスーパースターの報酬を決める重要な要素となることを意味している。同じトップの選手でも野球やサッカー、ゴルフの間では報酬が異なるが、それはおおむねファンの数によって異なる。また同じ選手でもマーケットのサイズが異なると、報酬も大きく違ってくる。ちなみに、松井秀喜選手が巨人から離日直前に受け取っていた年俸は、6億1千万円であったが、ニューヨークヤンキースとの今年の契約では推定年俸は7億円を超える。しかし、この額は大リーグでは50位以内にも入らない。松井選手はそこではまだスーパースターとは言えないのである。

スーパースターを生み出すもう一つの要因は、他のプレーヤーとの代替の難しさである。多くの観客は一流選手のプレーをお目当てに見に来るのであって、並の選手のプレーを何度見ても満足はできないだろう。また小澤征爾指揮のコンサートなら出かけるが、並の指揮者ならば、行かないという人も多い。しかも、それは単にパフォーマンス

スの差だけとは言い切れない。指揮の違いによる音楽の差を聞き分けられる人がどれほどいるというのだろうか。プロ野球を例にすれば、巨人の清原選手の打撃成績は、松井選手の移籍後、4番打者としての役割を果たす高橋由伸選手と比較して少なくとも2シーズン続けて悪い。特に昨シーズン、打数は4分の1以下であるし、打率は9分近くも低い。にもかかわらず、高橋選手の年俵は、3億円と清原選手よりも1億5千万円も低い。さすがに今年の契約更改で清原選手の年俵は3億6千万円となったが、それでも今年の高橋選手の年俵よりも2千万円も高い。

このようにパフォーマンスによって説明できない差をどのように考えたらよいのだろうか。人々はそれを過去の実績の違いに求めるだろう。たしかに、清原選手には西武時代からの輝かしい実績がある。しかし、それは現在のチーム成績に貢献するものではない。にもかかわらず、なぜ球団は高い報酬を払うのだろうか。この問題を解く鍵は、結局のところ、清原選手の集客力にある。これまで彼はその実績とともにファンを増やしてきた。彼の特異なキャラクターやドラフトでのいきさつもそれを後押しした。まさにプロ野球選手として長くドラマを演じてきた清原選手だからこそ、たとえ三振したとしても、観客は今やそれをドラマの一部分として楽しむことができる。彼の報酬にはその部分も含まれている。

歌手やピアノ演奏者、ボクサーのように、個人もしくは少数の者が主役で観客を呼ぶ場合には、その集客力や興行収入は容易に把握できる。したがって、興行主は損をしない程度にスーパースターにどれぐらいの報酬を支払えばよいかを容易に計算できる。しかし、チームで競技をする場合には、個々の選手の集客力を測るのは難しい。いくらスーパースターがいてもチームとして負け続ければ、集客力は低下する。このとき、スーパースターへの高額な報酬は、球団にとって重荷になる。ましてや経営基盤が弱い場合にはなおさらである。したがって、スーパースターは弱いチームには長く在籍できない。しばしば、すばらしい成績を残しながらも、スーパースターになれなかった選手をみかけるが、それは弱いチームに長く在籍した選

手である。元阪神監督の野村克也氏の南海時代がこの例である。またイチローや中村選手が米国に飛び出した背景にはオリックスや近鉄といった弱いチームに在籍していたことも一因であると思われる。一方、もしチームが勝ち続ければ、集客力を維持できるが、同時にスーパースター以外の選手の報酬も高くなる。同じような成績を挙げながら、所属するチームによって報酬が異なるのには、こうした理由がある。

どんなすばらしいスーパースターにも引退の時期は来る。人間は忘れやすいから、パフォーマンスの低下とともに、スーパースターに対するイメージは色あせ、次第に集客力が落ちてくる。チームの勝敗にも影響する。こうして引退の時期が組上に上る。しかし、スーパースターの引き際はむづかしい。そこには選手の美学やプライド、チーム事情などの様々な要因が絡むが、彼らのもつ集客力がさらにそれを難しくする。王や長島選手のように、彼らに相応しい3番や4番を打てなくなったからと言って辞めることのできたスーパースターは幸せである。彼らには監督のポストも用意され、集客力への配慮もなされた。しかし一方では、その圧倒的な集客力ゆえに悲壮な引退を経験するスーパースターもいる。肝臓を思いボロボロになりながらも、貴乃花は土俵に上がった。最後に彼が優勝した際にテレビに映し出されたその形相には鬼気迫るものがあつたが、同時に悲壮感も漂っていた。それでも、曙の現状を思えば、彼は相撲部屋を継承できただけよかった。

もう並の選手の力しかないのに、現役でプレーし続けるスーパースターもいる。知名度があり集客力がある分だけ、チームは優先的に使おうとする。しかし、チャンスに凡打を繰り返したり、ピッチを幾分ゆったりと走り、すぐに息の切れる昔のスーパースターをみるのは、寂しい。やはり過去の輝かしいプレーが人々の脳裏から消えないうちに引退することがファンへのサービスである。スーパースターの高額な報酬にはこうした役割を立派に果たすことに対する部分も含まれることを最後に銘記しておこう。

(おおはし・いさお 一橋大学大学院経済学研究科教授)